

平成三十年「花のまわりみち」

俳句入選句

木村 里風子 選

特選

(三句)

「二席」

八重桜円心に置く父の椅子

藤井初野

(評) 父を中心にして八重桜を賞でる一家族の絆である。円心に置く、この措辞がすべてを物語っている。

「三席」

ことし花仰ぐ術後の試歩確か

藤本 卓昭(卓水)

(評) 不安な気持ちで出かけた。試歩も兼ねてである。美しい八重桜を仰ぐ、見て廻る、ふと術後のことは忘れていた。もう大丈夫と自分を得たのである。

「三席」

童心に返りて花のまわりみち

谷口敬誠

(評) 花以外でも、見る目を新しく、感じる心を新しくしないと感動は生まれない。初めて見る八重桜、その心に感動が湧く。美しいと。

入選

(五句)

花散りて風の道行き見つけたり

登地 桂

(評) 桜の花びらが散る、散る方向が風の道と知った。物理的発見である。

ローマ字の立て札の増え八重桜

若宮 直美

(評) 最近は外国の人の旅に日本が選ばれる。自然が美しい。人情の濃さか。案内にも気配りが届く。

鷺の脚すり抜けてゆき花筏

山崎 和子

(評) 鷺の歩き方、抜き足、差し足である。美しく溜り流れる花筏を崩さぬように。

立ち止まり振り返りみる八重桜

油目 忠之

(評) 一読して八重桜の美しさが分かる、普段の心と普段の表現である。

揺れ揃ふしだれ桜にまたもどり

野津 訓子(訓子)

(評) 美しさに心がひきつけられたのである。しだれ桜の揺れようをもう一度目に、美しさは言外にある。

佳作

(十八句)

道ゆずる保育園児に散る桜

上田 純子

妻が先引かれて歩く花回廊

福永 將來(完爾)

花さかり光の中にかぜそよぎ

宮崎 洋一(桃良)

かくれんぼ八重の木陰で寝る子供

土屋龍三(りゅうじい)

大枝のかしぐ先まで八重桜

高井 瑞江

海越えて来し花の道雨となる

清水 優子

工場のガラスの壁に花回廊

石橋 康徳

残り花帰らぬ父を想ひけり

秋元 博(春秋)

みどり児の見つめる先の桜かな

谷澤 和子

朝夕と桜づくしの時過ぐす

岡崎 秀俊

待ち焦がれ花咲く見ずに逝った母

三宅 総一郎

漢詩ひとつ思い出したる落花かな

吉川 徳子

母逝きて五度目の花のまわりみち

安井 恵子

開門を待つ間しばしの花ふぶき

吉岡 昌文(雅文)

妻見れば桜の下の乙女かな

宮野 高光

口々に指さす園児花万朶

星加 鷹彦

花吹雪黄泉の母へ花電話

船本 世紀子

夜桜の人の途絶えし小暗がり

正山 史明

選者吟

鳥の来て大房の花揺すりけり

木村 里風子